

## 落ち椿

池松 孝子

椿は中国では「山茶」と書く。「椿」は日本が独自に当てたいわゆる国字、よって中国では通用しない。他家受粉で結実するため、容易に交配し、花の色、形に変異が生じやすい。国内だけでも六百種以上あるという。成長が遅く、寿命が長いのも庭木としてはうれしい。

椿の葉は肉厚で緑濃く、花の赤とのコントラストはちょっと南国的でもある。本州以南、日本全国に分布し、海岸線にも多く自生している。海の青と椿の緑、赤の取り合わせもすばらしい。

日本酒の醸造に必須とされる木灰の中でも椿の木灰が最高だと聞く。さらに椿油としては勿論、古くは染色にも欠かせないものだった。このように利用価値が高いことや花が美しいことからか、すでに『出雲風土記』に出てくる。

それまで大名、公家が好んだ椿が江戸時代には庶民の間にも流行した。椿は花が開ききらないうちにぽとりと落花する。それが首の落ちるのを連想させるため武士には忌み嫌われた。似た花の山茶花が、ばらばら散るのに比べると椿はずっと気品がある。

地に落下した花こそが椿の醍醐味ではないかとも思う。苔の上に落ちた花の並び方などにはデザインされたような美しさがある。それが日本画、扇など伝統美の題材にもなってきた。木から落ちてこそその美、風情を感じさせる花はそんなに多くはあるまい。特に春を待つ頃の雪の上の落ち椿は格別だ。

浄土とは椿落ちたる樹下のこと

中原 道夫

以前、京都天龍寺の庭で見た落ち椿は忘れられない。自然に落下したはずなのに、花の配置まで考えて、自然の中にひっそりと置かれたかのような「落ち椿」はなんと魅力的なことか。日本人でよかったと思える時でもある。

さらにしだれ梅と落ち椿の「コラボ」を楽しめる贅沢な景色がある。それが京都伏見区の城南宮である。やや白に近い薄紅色のしだれ梅がはらはらと散る。そのしだれ梅のピンクの絨毯を向こうに見て、手前に苔の上に落ちた真っ赤な落ち椿が見事だ。人気のスポットだという。